



ライブ本番までに 3つの準備 済ませておきたい

軽音楽部での活動や楽器の演奏をする上で、目標の1つとなるのが「ライブ」です。夏はただでさえ各地で大会やコンテストが多くなる季節。新入部員の1年生にとっては待ちに待った初めての「本番」という人も多いでしょう。ライブはその名の通り泣いても笑っても一発勝負。悔いのないステージを万全の体制で迎えるために、しっかりとした準備をして本番に臨もう！

ボーカル



＝余裕を持つための準備

本番に向けてメンタル的な余裕を持つためには、早めにメロディと歌詞を覚えることが一番です。メロディと歌詞が早くから頭に入っていれば、発声やリズム、合奏、感情を込めた細かい表現といった「歌うこと」に意識を持っていくことができます。

歌詞を覚えるには自分で「書く」ことが効果的です。同時に「プレス」の位置や歌い方などを書き込んでおくと、やるべきことが明確になっていきます。正確なメロディで歌えるように、ピアノアプリなどで音程確認をしておくといいでしょう。何となくではなく、歌のピッチが安定します。また、ボーカルの入るタイミングをきちんと把握することも大事です。イントロは何小節で歌が入るのか…などをしっかりと理解しておきましょう。

本番では歌うだけではなく、フロントマンとして客席に気を配りながらライブを盛り上げることもボーカリストの大事な役割です。楽器も演奏する人は覚えることが多いので、早めに「やること」を覚えてしまいましょう。

＝機材の扱い

ボーカリストは、基本的にマイクとマイクスタンドが唯一の機材です。

楽器を弾きながら歌う人は、マイクスタンドの位置や高さ、角度をシミュレーションして自分のベストなセッティングを見つけておきましょう。ハンドマイクの場合は、マイクの持ち方も普段から気をつけておかなくてはなりません。普段の練習場所とライブ会場では音響の環境が違います。マイクのグリル部分を覆うように握ったり、モニタースピーカーにマイクを向けたりしてハウリングを起こさないように普段から十分に注意しておきましょう。

学校にモニタースピーカーがあるなら、自分の声の返り具合を試しておくとも本番でも怖くありません。自分の声や他の楽器がどのくらい聴こえていれば歌いやすいかを知っておくと、サウンドチェックの時に指示しやすくなります。

＝体調管理

体が楽器であるボーカリストが最も気をつけなければいけないのは体調管理です。風邪などをひかないようにすることはもちろん、喉のケアも忘れずに行いましょう。

本番の日が近くなったら大声で騒いだりせず、よく睡眠を取り、辛い物など刺激の強いものは控えましょう。また、本番直前の練習で頑張って歌いすぎて喉が枯れてしまうこともあるので注意しましょう。

ギター



＝フレーズのチェック

本番でベストなプレイをするためには、できるだけ反復練習をして体で覚えていくしかありません。何度もミスしてしまうフレーズは本番でも間違える可能性が高いので、その部分だけ集中して繰り返し練習しましょう。しかし、それでも弾けないフレーズは余裕を持って弾けるフレーズに変えてしまうのも1つの方法です。これは逃げではなく、いわゆる「リスクマネジメント」というものです。

ギターソロやテーマメロディを弾く場合は、フレーズの最初と最後をよく練習しておきましょう。気持ち良くフレーズに入れたり綺麗に終わることができれば、結果として楽曲全体も良い印象になります。

＝音作り

ギターアンプは、できれば普段の練習から本番と同じ機種を使用してツマミの位置を決めておきましょう。エフェクターを使う場合も、練習中にしっかりと音作りをしておくことはもちろんですが、スイッチングするのであれば各音色のボリューム設定も忘れずしておきましょう。また、おろそかにされがちなのが音色を切り替えるタイミングです。小節の頭なのか、弾き始める1拍前なのか…。切り替えもフレーズの1つだ

と捉えて練習しておきましょう。

しかし、どんなに準備や調整をしても、本番のステージでは聴こえ方が変わります。すぐに微調整ができるように、アンプやエフェクターのことをきちんと理解しておきましょう。エフェクターを借りたり使い回したりするのはやめておいた方が無難です。自分が使い慣れているものでなければトラブルに素早く対処できません。

エフェクターを使う場合は、出番前にできる限りエフェクターボードに組んでおいて、ボードごとステージへ持って行けるようにしておくことでセッティングが早くなります。シミュレーションしておきましょう。

＝楽器の状態

弦は本番の前日に張り替えておきましょう。張り替えたらチューニングが安定するまで弾いて、弦をよく伸ばしておきます。しかし、それでも温度差によってチューニングは安定しないので、ステージに上がった後何度もチェックしましょう。また、張り替えただばかりの弦でも切れることがあるので、予備の弦の持参は必須です。

その他、接続ジャックやシールドケーブルといった電気系統の接触不良や、ネックの反りなどの楽器の状態も事前にチェックしておきましょう。

ベース



＝フレーズのチェック

ベースは、リズムとコード（和音）の両方でボトムを支える、アンサンブルにとって重要なパートです。自分のことだけにとらわれず、他のメンバーの音にも意識を向けられることが大切です。

具体的には、コード（和音）に対して自分が弾いている音が間違っていないか、ドラムが出すリズムやフレーズとのコンビネーションは悪くないか…などを、何度もチェックしましょう。

既存曲の場合、難しいテクニックが駆使されていることもあります。練習を怠らないようにすることはもちろんですが、どうしても弾けないフレーズは思いきって簡単にしてしまうことも、ミスが目立つベースには有効な手段といえます。

＝音作り

ライブでは複数のベーシストが同じベースアンプを使います。サウンドチェックで作った音色や音量は忘れないようにメモしたり写真に撮っておきましょう。

広い会場になるとシールドケーブルをアンプではなく、DI（ダイレクトボックス）につなぎます。これは、音響スタッフに任せておけば良いことで、自分で用意するものではありません。

ませんが、初めて使用する場合は使い方や音の聴こえ方、注意点などを先輩に聞いておきましょう。

エフェクターを使うのであれば、あらかじめ普段の練習の時に音作りをしておき、ライブ当日は微調整程度に留めましょう。事前の音作りを終えたら、蛍光シールなどで目盛りをマーキングしておく見えやすく便利です。また、本番で使わないエフェクター類は外しておきましょう。音の劣化が軽減されます。

＝楽器の状態

弦は手汗や皮脂などで劣化し、徐々に音にハリがなくなります。弦の新しさによる音の違いには好みがあるので交換の時期は人それぞれですが、交換したばかりの弦はチューニングが狂いやすいので、演奏する前に何度も確認するようにしましょう。また、念のために予備の弦は必ず準備しておくで安心です。

楽器は使うにつれて状態が変わります。本番当日に音が出なくなってしまう…ということにならないように、本番日が近づいて少しでも心配なことがあれば、楽器店に持って行ってみてもらいましょう。シールドケーブルの断線やジャックの接触不良もよくあります。楽器と同じように普段から大切に扱いましょう。

ドラム



＝テンポとフレーズ

まずドラマーが必ずやっておくべきことは、演奏する楽曲のテンポを確認できるようにしておくことです。本番では緊張や焦りからテンポ感がおかしくなってしまうことがあります。

普段の練習の時から演奏前には必ずメトロノームで確認するようにして、できれば本番前も確認できる準備をしておきましょう。個人練習でもメトロノームに合わせて練習をして、ズレてしまう部分を重点的に修正しておきましょう。

本番が近づいて、どうしても叩けないパターンやフィルインは、無理なく叩けるフレーズに変えてしまうことも、バンド全体のことを思えば間違いではありません。

＝セッティングの確認

ライブで使うドラムセットは、普段

のものと違うことも多いと思います。セッティングしづらかったり叩きにくく感じることもあるかもしれません。なるべくいつもと同じように調整したいところですが、はっきり言ってこの部分は諦めるしかありません。せめて、本番で使用するドラムセットのタムのインチと深さ、タムホルダーの形状、シンバルの数などを事前に確認しておき、できるものは前もってシミュレーションしておくで安心です。

持ち込み機材が多いと転換に時間がかかります。あまり叩かない小物はセッティングリストから外すなど、持ち込み機材をなるべく少なくしていくことも選択肢の1つです。セッティングにどのくらい時間がかかるのかを事前に測って、効率の良いセットチェンジの練習もしておきましょう。

反対に、演奏面で最も影響するペダルは自分のものを持参する方が良いでしょう。使い回しのペダルを好みに調

整している時間はありません。普段使っているものが使えなければ購入も視野に入れておきましょう。また、スネアを持ち込むのであれば、打面ヘッドは前日に張り替えて少し叩いておくで皮が馴染みます。

＝音量のバランス

大きな会場ではドラムにもマイクを立てます。叩く音量が小さ過ぎるとマイクが音を拾わなかったり、突然大きな音を出すとスピーカーが壊れてしまう可能性もあり、音量の加減が大切です。普段からバランスの良い音量での演奏を心がけましょう。

また、スネアを叩いた時のサウンドの安定度、3点（スネア、バスドラム、ハイハット）の音量バランス、フィルインの音量などもチェックしておきましょう。

キーボード



ニフレーズの整理

既存曲をコピーする場合、たくさんキーボードのフレーズが入っていて、どうしても演奏できない場合があります。また、高度なテクニックが必要で再現できないことも多いと思います。全体像を把握して、セクションごとに必要なフレーズを取捨選択したり、どうしても不自然ではなく似た感じに聴こえさせられるかを検討しておきましょう。スプリット機能を使ったりフレーズを簡素化するなど、有効な手段を考えて早めに整理しておくことで、やることははっきりして練習に臨めます。

複数の音色を連続して変えなければならぬ時も、なるべく音が途切れないようにスイッチングできる方法を考えておく必要があります。ボタンを押すタイミングを見つけれれば良いのですが、ペダル類を使って操作する方法もあります。また、本番は立って演

奏するのであれば普段から立って練習しておきましょう。

ニ音作りの整理

キーボードの事前準備には音作りが不可欠です。例えば、ピアノの音色で演奏をする場合、楽器にプリセットされているすべての音色で弾いて確かめ、バンド練習時に内蔵エフェクターやイコライザーを使って音色を整えていきます。使う音色すべてを同様に試しておきましょう。

演奏で使う音色が決まったら整理しておきます。作った音色や音量を保存できる機種の場合は、リネームしてライブで使う順にセーブしておくとう便利です。

本番で会場のキーボードを使用する場合は、必ず事前に機種をリサーチしてUSBメモリなどで自作の音色を取り込めるのかを確認しておきましょう。取り込めない場合は当日の音色作りに

時間がかからないように、事前に楽器店で本番と同じ機種を触ったり操作を調べておけば安心です。

ニセッティングの確認

本番の会場ではキーボードスタンドが使い慣れていない機種の場合があるので、事前にスタンドの種類も確認しておきましょう。普段使っているものを持ち込めればベストです。当日のセッティングは高さ調整以外にも、電源コードを挿す、シールドケーブルをDI（ダイレクトボックス）につなぐ、ペダル類を準備する、音色を確かめる…とたくさんあります。普段から素早くできるようにしておきましょう。

大きな会場ではステレオで出力することが一般的です。なるべく普段の練習の時からステレオで出力するようにしましょう。

アンサンブルとして

バンドやユニットで演奏する利点は「1人ではない」ということです。メンバー同士で助け合い、おぎなう合うことで演奏が「1+1 = 2」以上のものになります。しかし、逆に言えば1人ひとりが個々にどんなに頑張っても、全員でまとまった「合奏」ができていなければ良い音楽にはなりません。本番までに、個々の技術力を活かした「全員で音楽する」ことの最終確認をしましょう。



▲ライブは「合奏」を披露する場です。力を1つに合わせよう

音量のバランスを取る

普段の練習場所とライブ本番のステージでは、広さや部屋の共鳴、使用機材などが違うため、当然ながら自分たちが出すサウンドや聴こえ方は変わります。大会や広いステージに慣れていれば予測をつけて音作りをしておくこともできますが、経験の少ない人にとっては未知の世界です。

しかし、どちらにしても当日の微調整は必要となります。例えば、ギターのエフェクターのかかり具合、ベース

とバスドラムの低音域のマッチング、キーボードの音色ごとの聴こえ方、スネアの響き具合…などは、サウンドチェック時と本番とでも変わります。普段から、ギターアンプやベースアンプ、マイクやキーボードを入力しているミキサー、ドラム全体のチューニングなど、各パートの音量や音色のバランスを常に注意して、演奏しながらでも微調整できるようになれることを目指しましょう。

音色や音量のバランスは、セクションによっても変える必要があります。例えば、ギターはコード弾きからソロ

などの単音になるだけでも、音圧に差が出て音が小さくなったように聴こえてしまいます。物足りないと感じたら、音色を変えたり音量を上げたりするためのエフェクターを用意したり、マルチエフェクターを使用する場合は変化がつくように設定をしておきましょう。

キーボードは演奏が片手でも何とかなるのであれば、慣れないうちはボリュームペダルよりも楽器のマスターボリュームをいじってしまった方が繊細に表現できると思います。

他にも、キーボードによるメインリフのメロディやドラムのフィルインな



▲録音や録画をしてみて、客観的に音量やリズムが合っているかをチェック



▲良いアンサンブルに有効なのは、メンバー同士でたくさん話し合うこと

ど、音量や音色がおかしくないかをメンバー同士でお互いにチェックし合っておきましょう。

リズムを合わせる

ドラムとベースは「リズム隊」と呼ばれますが、バンドのグルーヴはドラムとベースだけで作るものではありません。それぞれが良いリズムで演奏できることが理想ですが、最終的にはドラムとベースによって作り出されているリズムの土台に、ギターやキーボードなどの他の楽器が乗り、さらにその上でそれらを従えてボーカリストが歌うという図式になります。

それぞれのパートが自分のやるべきことをしっかりと行いつつ、どこかで他のメンバーのことも意識していなければいけません。まずは、すべてのパートに唯一共通していることをメンバー全員で共有しましょう。

ドラマチックさの演出を確認

良いアンサンブルのポイントは、技術的なことやリズムを合わせることだけ

ではありません。メンバー間で気持ちが1つになっていることが最も重要です。歌詞の意味、楽曲のイメージや世界観、伝えたいメッセージなどが全員で共有されているかを確認しましょう。

ポイントは、そのイメージを音量のダイナミクスで表現できているかです。サビはどのくらい盛り上がるのか、対してAメロはどのくらい抑えるのか…。セクションごとに決めた演出がきちんとできているか、そして、そのつながり目もドラマチックになっているかも確認しましょう。

「通し練習」で最終チェック

ライブ本番の日が近づいたら、本番のステージを想定して、セットチェンジから演奏終了後の片付けまでを含めた一連の流れをそのまま通して行ってみましょう。どんなタイミングで演奏を始めるのか、ギターソロはギタリストがステージの前に出るのか、エンディングでは何か決めポーズを作るのか…など、台本を書くように細かく行動を決めておいても良いでしょう。

大会や演奏会のルールに従って時間

通りに素早くセッティングすることはとても重要です。大会であれば、時間オーバーは失格になる可能性もあります。時間を測って何度もシミュレーションしておきましょう。そうすることで、当日は慌てることなくステージに向き合うことができ、余裕を持った演奏ができます。

また、演奏前にボーカリストが何か喋るのであれば、同じように行っておきます。ステージに上がると頭が真っ白になるなんてことはよくあります。話す内容、演奏を始めるタイミング、最初の1音を出すまでの立ち姿…。歌番組に出ているような気持ちでオープニングの演出を考えましょう。もちろん、何もしなくても構いませんが、ステージに上がった瞬間からもう観客はこっちを見ているということを忘れてはいけません。それは演奏が終わってからと同じです。ステージを降りるまでをしっかりと自己プロデュースしましょう。

スマートフォンやタブレットなどで動画を撮影して、客席からはどんな風に見えているのかを意識したり、軽音楽部のバンド同士で意見交換をして修



▲ライブはスタッフとの共同作業。有意義なサウンドチェックが成功への鍵

正点を指摘しあうといった練習を繰り返すと効果的です。

サウンドチェックの準備

ほとんどの場合、ライブ本番前には「サウンドチェック」を行います。誤解している人も多いのですが、サウンドチェックは本番前の練習時間ではありません。演奏者が良い環境で本番を迎えられるように、音響スタッフがバンドが出す音を確認したり、照明スタッフがバンドのステージングや演奏に合

わせた照明を確認する時間です。

注意点は、「本番でやることをそのままやる」「サウンドチェックでやらなかったことは本番でやらない」ということです。例えば、本番でギターソロの時に音量を大きくするのであればサウンドチェックの時にやっておかなくてはなりません。予定外のことを本番で突然やってしまうとスタッフに迷惑がかかり、機材トラブルの原因にもなります。ライブは演奏者とスタッフの共同作業です。その気持ちを込めて、お互いに元気よく「よろしくお願いします!」と挨拶し

ましょう。

そして、サウンドチェックは演奏者のための確認時間でもあります。セッティングの調整、音量や音色の最終的な調整、モニタースピーカーの調整などを行います。イベントによってはサウンドチェックの時間がごく短い場合もあります。普段の練習時に楽曲のどの部分を演奏すれば音響スタッフがわかりやすいか、何をチェックしておけば良いのか…など、スムーズに進めるための準備をしておきましょう。



モニタースピーカーに慣れておこう

ステージで各メンバーの足元にある「モニタースピーカー」は、自分の音や他パートの音を返してもらって自分の演奏や合奏をしやすいするためのものです。モニターの音作りのコツは、返す音をなるべく少なくして必要なものだけを返してもらうことです。慣れていないと難しいかもしれませんが、ステージの中を演奏しやすい環境にすることを目指しましょう。

できれば、ボーカリストは普段の部活動でモニタースピーカーを使っていた方がベストです。常にモニター環境を気にして、音量、スピーカーの向き、イコライジングなどを調整していると、本番のサウンドチェックでも好みのモニターが素早く作れるでしょう。演奏中でも修正の指示が出せるぐらいが理想です。



▲モニタースピーカーの調整は結構大事

ステージングとして

大会では演奏力だけではなく、元気良く若さ溢れる高校生らしいパフォーマンスが賞の獲得につながることもあります。しかし、大会に限らず、ライブ本番では自分の演奏やバンドのアンサンブルが崩れないように注意しながら、客席に対する「視覚的な表現」も求められます。本番への最終調整として、ステージングの準備も怠らないようにしておきましょう。



▲本番を想定した「ライブ練習」をしておくと本番でも余裕が出る

一体感を「演出」する

ステージング、ライブパフォーマンスなどいろいろな言い方をしますが、ライブでは視覚的な表現も大事です。ライブ経験が少ない人は、恥ずかしかったり自分の演奏で精一杯になってしまうかもしれませんが、まずは無理なくできることからやっていきましょう。

ステージングのキーワードは「一体感」です。メンバー全員が一丸となっ

てステージを作り上げる、その一体感を意識すればアンサンブルはまとまり、バンドとしてのトータルサウンドも良いものになっていきます。可能であれば、一体感の演出として「衣装」を合わせることも効果的です。

表情、目線を考える

楽曲には、歌詞やアレンジに「感情」が含まれています。楽しい、悲しい、切ない、嬉しい、怒り、希望、失望、

迷い…。楽曲の中でその感情が変化していくことも多いでしょう。それを歌（歌詞）や楽器の演奏という耳からの情報だけではなく、目からも訴えかけていくことが「ステージング」です。

歌詞や感情に添った表情をすることはとても効果的です。特に、目元や口の動きは重要で、それはボーカリストだけではなくメンバー全員が考えておくべきポイントです。

大事なものは目線です。しっかりと前を向いて客席に歌詞のやメッセージを

届けられるように、練習時から会場の広さを想定したステージングを心がけておきましょう。特に楽器陣はずっとネックや鍵盤を見てしまいがちなので気をつけましょう。

動きを考える

イントロやサビの前など「ここぞ!」という時にはドラムの方を見たり、キメ、シンコペーションなどのリズムに変化が起きる箇所には全員で体の動き

を合わせることも、バンドの一体感として映ります。

自分では大きく動いているつもりでも、撮った動画を見返すと意外とこじんまりしていた…なんてこともよくあります。歌ったり演奏している時に自分がどう見えているのかを何度も確認しておきましょう。とはいえ、慣れていないのであれば無理に大袈裟なパフォーマンスを考える必要はありません。全員がしっかりとリズムに乗れて共有できていれば、その体の動きだけ

でバンドの躍動感が出ます。

本番ではモニタースピーカーやマイクスタンドがあるので、自分の立ち位置からあまり動けなくなってしまう。少しオーバー目にアクションするぐらいが見ている方には自然に見えます。また、ギターソロでステージの前に出たり、ボーカリストがステージを大きく使ったりすることで、観客の視線は動き、ワイドなパフォーマンスに見せることができます。



照明でステージングがレベルアップ!

本番のステージに照明がある場合は、ステージング演出のプランに組み入れましょう。事前に配布されているセッティング図に「全体的に青っぽく」「Aメロは薄暗い中でボーカルにピンスポットを」「ラストはリズムに合わせてピカピカして」といったリクエストを書き込んでおきましょう。もちろん、できることには制限がありますが、実は「お任せします!」という優しさが一番困ってしまう注文なのです。



▲照明のイメージもみんなで話し合おう